
西園寺家の秘密

K n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

西園寺家の秘密

【著者名】

ZZマーク

K
n

【あらすじ】

世界で1、2を争う大財閥の次期後継者西園寺スミレにはある重大な秘密があった。それは……。

Act・1 秘密

白いブラウスの上からノースリーブの黒を基調としたシンプルなワントピースで腰に白いエプロンを身に纏った女性、小林 咲は今晩開かれるパーティーの準備をするために愛想のよい「コニコ」とした笑顔を浮かべ、主人の部屋のドアを叩いた。

コンコン。

咲

「お嬢様、お召しかえしますよ。」

よじつ

咲

「お嬢様っ！？」

しかし、その笑顔は瞬く間に驚きへと変わった。

なぜならば主人が窓から飛び降りようとしていたからである。

呼ばれた本人は氣樂そうに舌をだし、アッカンバーとした。

スミレ

「またパーティー（あんな所）なんて退屈！後はよろしくね 咲つ！」

咲

「そつそんない！」

悲鳴のよじに言つメイドのことなど関係ないとばかりにスミレはそのまま飛び降りた。

咲

「困りますううう～！」

スタン。

軽々と膝をつき着地すると文字通りソーマコとした。

スミレ

「あーで今日まだいこ行いつかなかー

スミレは立ち上がり膝についた砂を払つと胸の前で両手を絡め、光
悦とした笑いを浮かべた。

スミレ

「あのムカつく執事もいないし…最つ高…ッ…」

ポンつ

その時誰かが背後からスミレの肩に手を乗せた。

「楽しそうだなア。」

スミレはまさか！と素早く振り向くと白い半袖のカッターシャツの上に黒のシンプルベストに同じく黒いネクタイとズボンをはいた若い男が立っていた。

スミレは男を見ると顔をしかめた。

スミレ

「ゲッ！…御堂 要つ……」

彼こそが今言ったムカつく執事だからだ。

クルリと踵を返して長咄は無用とばかりに冷や汗を頬に垂らしながら言った。

スミレ

「じゃあ…私はこれで…」

ガシツ。

につーーつ。

要

「そんな訳ないでしょ、うへ、今回も一肌脱いで頂きます。」

要は顔をスミレの耳元に近づけると気持ち悪い位の笑顔で言った。

スミレ

「……で、ですよね……」

「西園寺グループは年商数億万ドルの世界で1・2を争う程の大財閥で飛行機からデパートまでその事業は広く」

その後、大人しく要に連れられいつものように咲にセットをしてもらつた。

咲

「あ、もういじこですよ」

くじを手に持ちながらスミレを眺め満足そうと言つた。

「その次期後継者である私　　、西園寺スミレは一族や重役にもじらせていないある秘密がある。」

「それは……」

咲の言葉を合図に隣の部屋から姫が出てきた。

要は縦長の下に四口四口のついた鏡を転がし椅子に座つてこるスミレの前に設置した。

要

「どうぞお嬢様。 いえ、」

鏡には水色のシャツに白のリボンを結び、右袖には西園寺家のエンブレムが施されていて下は黒い短パンをはき、優雅に座つた男の子が映つていた。

要

「坊ちゃん。」

〔 変装して『野』と偽つてゐる」と。〕

西園寺家の秘密

Act . 1 秘密

8月21日更新。

Act 2 一族のおきて

プロローグ

黒塗りの立派なりムジンが夜の町を走っている。

その車の中で執事が黒い革の手帳を開けスケジュールをスラスラと
言っていた。

要

「本日は我社の新しいホテル、エリザベスホテルにてオープニングセレモニーがござります。そして……」

スミレ

「わかつてゐる。『次期後継者らしく振る舞え』つーことだろ?」

またか。と半ばイライラしながら腕を組み言つた。

要は満足そうに笑つたがすぐに声色を低くした。

要

「はい。あと、『J存知だとは思いますが……くれぐれも秘密がもれませんように。』」

パタン。

手帳を閉める音が静かな車の中に響いた。

窓へと視線を向け少し間をおいてから呆然と言つた。

スミレ

「……わかつてゐや。そんなへマはしねエーみ」

キキキ——……

目的地に着いたようでも要は素早く降りると車の後ろから回ってスミレのドアを開けると「いや、いや、しぐれをした。

スミレは優雅に降りると後ろで立てる要に口を尖らせた。

スミレ

「それがテーマの好きな『一族のおきて』だもんな。だからムカつくんだよ。」

要はそんな嫌味を気にしない様子で嬉しそうにニーナココと笑った。

要

「流石です坊ちやん。」

パーティー会場には大財閥、西園寺グループが主催者なだけあって世界各国の有名人やお金持ちの人気がいた。

スタスター。

その会場の入り口からステージにむかって伸びるレッジ・カーペット
を堂々と歩く少年と執事がいた。

参加者達は彼らを前にすると注目した。

男A

「オイっあれって……」

男B

「ああー西園寺さんだー！」

男A

「女共の目が光ってるなあー」

男B

「そりゃやうやうーー！結婚したら世界を治めたのと回じなんだから
なアーー！」

パツ。

スミレがステージに立ち壇上の前に立つと待つてました。とばかりに会場が暗くなりステージがライトアップされた。

しん……

そして彼に対しての興味や憧れなどのがわめきも暗くなった瞬間静まり返った。

〔西園寺家は昔から男尊女卑思考が高く〕

〔当主は一族の中で最も優秀でかつある条件を満たした者で〕

スミレはこゝやかな笑顔と威厳をもつてマイクでスピーチをした。

スミレ

「皆様お忙しい中、オープニングセレモニーをお越し下さりまして誠にありがとうございます。本日は……」

〔『男』と決まっている。〕

約1分半程でスピーチは終了し盛大な拍手が響き渡った。

スミレ

「簡単ですが開会式を終了させて頂きます。」

ワ――――
パチパチ――

疲れたようにステージから降りるトヨが満足そうに微笑み出迎えた。

スミレ

「ハー、これでいいんだろ要。」

要

「ええ、」立派でした。」

「西園寺君ーー。」

一人は声のするほつに顔を向けると色黒の中年のおじさん^{が立つていた。}

スミレ

「…若林さん」

突然呼ばれたので反応が少し遅れてしまった。

彼はある鉄鋼業を主とする中小企業の社長の若林 博文。^{ひろぶみ}

何代も続く老舗で我社の船や車を作るときにお世話になつた会社だ。

がはははと笑いながら言った。

若林

「いやあ少し見ない内に大きくなつたなあ。最近どうだい？ああ、娘を紹介するよ。」

そういうや否や若林さんの後ろからピンクのドレスを身にまとつて恥ずかしそうに頬を赤らめでてきた。

若林

「娘の美和子だ。」

美和子

「あ、あのっ…

付き合つて下さいませんか？」

突然の告白に一人はポカンとした。

若林

「がははは、これこれ美和子は積極的的なつ」

脳内のフリーズがようやく收まり状況が掴めるとスミレは頬には自分が後ろで手を口に添えて必死に笑いを堪えている要に対し怒りマスクを、若林さんと美和子さんには苦笑いをした。

スミレ

「か、考え方をさせていただきます……。」

要

「…くつくつくつ

キヤーー！

美和子さんは嬉しそうに若林さんと何処かに消えて行つた。

要はバイキングからスミレのために取つてきただこ飯をスッキリした表情で渡した。

要

「付き合つて差し上げたら宜しかつたのに。

女ですけど。」

ニヤ～と言つた。

スミレ

「五月蠅いッ！――

フォークをもちながら吠えた。

スミレ

「人の事バカにしてないで『仕事』は片付いたのか?」

イライラとしながらお皿を受け取り横田で要を見た。

要はふふんと笑顔で言った。

要

「当たり前です。今頃庭で寝てらっしゃいますよ。」

庭には沢山ものマフィアの人人が伸びていた。

参加者は皆有名人や業界でも指折りの人達なので田頃から恨みを持つていてマフィアや拉致して身代金を要求しようと田論む輩がよく忍び込むのだ。

ちなみに要は西園寺グループ次期後継者の専属執事なだけあってやはりただ者ではなかった。

空手や柔道などの格闘技は勿論のこと、剣道やテニスなどのスポーツから料理や裁縫までなんでもこなすいわゆるスーパー執事だ。

そんなんでもこなしてしまった執事をどうも人間味がなく口ボットのように感じてしまうのを苦手に思つ要因だった。

スミレ

「……で、誰だったんだ？」

はむ。と肉を口に入れながら横田で聞いた。

脇に落ちないとでもこいつて面を険しくしてボソッと呟つた。

要

「宇水 鏡弥きょうまいでした。」

スミレ

「宇水か……！なんだ、不満そつだな

要

「いえ、……ただあまりこもすべく解つたので……。」

顔はそのまま月を見ながら「一ヤ一ヤしながら言った。

鏡弥

「なんでや？」

和風の豪華な家の軒下に一人の男女が座つて空を見上げていた。

大阪

芸者の女の子が隣にいる男に不思議そうに聞いた。

女

「月なんか見ておもうこ？」

女

「だつて鏡ちゃん楽しめんなやもん」

そう言つと身体を鏡弥にもたれかかった。

鏡弥

「ああ、乐しげでHーこれからゲームをかんがえるとなア」

の西園寺家の秘密

～Act.2 一族のおきて～

8月22日更新。

Act・4 一丸 光太

宇水家メイド長の櫛 薫は今日から入る新入生桜井麗に部屋の間取りと仕事の説明をしていた。

薰

「ここが調理室。で、ここが浴槽。…これで全て説明しました。何か質問は？」

薰はキリッと中指で眼鏡をあげると鋭く言つた。

スミレ

「……あのう。妙に女性率が高い気がするのですが……」

恐る恐ると手を挙げて先程から気になつていてることを聞いた。

おおやつぱに見積もつても女性・男性＝8・2位の割合で働いてい

る。

薰はなんだそんなことですか。とても言ひやうがひつと麗を見る
とキッパリと言つた。

薰

「坊ちゃんの嗜好です。」

麗

「ああ、そうですか……」

工口坊つてことか……

あんまり近づかないでおいひ。

呆れたように呟いた。

宇水家当主は女つたらしだ。といつ噂は聞いていたが使用人までも
女性で固める程だとは……。麗
「あの何をすれば？」

薰

「そうねえ……

じやあ坊ちゃんまへ夕食を運んでくれる? その時に挨拶も。」

パン……。

漫画なうばみ口にヒビが入る位だ。固く決意した瞬間に碎け散つてしまつとは……。

麗は恨めしそうに4時間前を窺い出した。

東京

スミレ

「要……何……の服は? ……」

要に手渡された服を隣の部屋で着ていたのだがあまりの衝撃に顔を真っ赤にしてドタドタと要の下へ走つたのだ。

スミレが手渡された服はメイド服だった。

丈も膝上でいわゆるミニスカートといつものだ。

ヒラヒラヒラリーンといつ効果音が聞こえてきた。うだ。

要

「あれ？ 嫌ですか？」

似合つてゐるの！」

裾を必死で押さえて怒つてこむお嬢様にキヨトンと見つめた。

スミレ

「当たり前よ……」

機嫌をなかなか治さないお嬢様に要はフリーとため息をつくと諦めた

よつて今回の作戦を語った。

要

「宇水 鏡弥の他に黒幕がいる可能性がありますので、まずはその黒幕を探るために潜入捜査をしてもらおうと。」

スミレ

「潜入捜査？」

要

「はい。宇水 鏡弥を嫌っている者もしくは我々と対立させたいと願っている者の犯行という線が強いので…

それともお嬢様には荷が重過ぎましたか？」

これが決定的だつた。

意地悪そうに笑った執事にキッと睨むと口をヒクヒクさせて呟いた。

スミレ

「……私を誰だと思っているの？」

西園寺 スミレよッ！――」

要は内心ほくそ笑みながら一言つと書いた。

要

「流石です。」

扱いやすい。

大阪

麗

「…と、意気込むのはいいけど……誰は黒幕なんだろう。」

麗ことスミレはため息をつきながら食堂から受け取った主人の夜ご飯を運んでいた。

ご飯も屋敷と同じく日本料理で沢山の小さな小皿に様々なおかずが入っている。

スツ。

うーんと考えに集中していたため背後に来た人に気がつかなかつた。

「黒幕つて?」

麗

「それはー…!」

宇水 鏡弥！！

笑いながら振り向くと背後にいたのは紺色の着物を着て右側はスッキリしていて左側は盛っているような黒髪の男だった。

鏡弥は田を細めて「一二一」と話した。

鏡弥

「君が新しく来たメイドやなあ」

鏡弥は両手を着物の裾に入れ、ジーッと麗を見つめるとズイツと詰め寄った。

鏡弥

「君

……

麗は冷や汗を浮かべたじたじと下がった。

麗（バ、バレた？！）

しかしそんな心配いらなかつたみたいだ。

ガシツ！！

突然麗の手を包むように掴むと「ココ」と嬉しそうに言った。

鏡弥

「ワイの彼女になれ！」

麗（ハア――？！？）

麗は思いもよらない告白に驚愕したがすぐに手を払うと鏡弥に捕ま
れた手を服で拭いた。

グイッ！

「デレデレしている鏡弥の耳を誰かが勢いよく引っ張った。

「「ハ！坊ちゃん！」」

鏡
弥

「い、ツ！」

鏡弥は突然の痛みに声にならない叫び声を出した。

「田を離すとすぐ」うなんですかから……」

白のカッターシャツに黒の長袖のスースを見てネクタイは青色で焦げ茶色のフワフワとした頭で眼鏡をかけた男が困ったように怒っていた。

鏡
弥

「光太！！！」

男を確認すると涙目で驚いたように言った。

麗

「…えつと ……」

状況がイマイチ飲み込めていない麗は言い争っている一人を手持ちふたさに見た。

その視線に気づいた鏡弥はニパツと笑うと隣にいる男を指差して言った。

鏡弥

「ああ、コイツはワイの執事の一丸 光太じょうたつて言うん

紹介された一丸は麗に気づくとキビキビと謝った。

一丸

「一丸だ。鏡が迷惑をかけた。」

麗

「い、いえ！…」

そんな一丸の真面目な態度に思わずどもつてしまつた。

一丸
「！」

一丸は一瞬何かに気づいたようにピクリと目を見張つた。

麗
「？」

なんだる？
今睨まれた……？

一丸
「じゃ、鏡行くぞ！先生が待つてゐる。」

しかし何事もなかつたように鏡弥の着物の衿を掴むと引きずつて行つた。

鏡弥
「ほななあ～ワイの天使～」

ブンブンと両手を振りながら引きずられていぐ鏡弥に苦笑いをしながら曖昧に手を振つた麗だった。麗（天使…）

ゾクーツと悪寒がして顔をしかめたのだった。

§西園寺家の秘密§

↓ A c t . 4 一丸光太↓

8月24日更新

Act · 5 密会

次の日の早朝。

キュキュ。

麗は欠伸をしながら窓を拭いた。

麗

「ふあああ～…」

……眠い。

いつも7時ちょうどに起にしてもうつていてるのに、今現在5時。
昨日までの自分はまだ布団の中なのに……と娘ましげに窓を強く拭
いた。

麗

「……」は寺か、つづーの……

そんな愚痴をこぼしていたら肩を棒のような物で叩かれた。

バシンッ！！

麗

「キヤツー！」

驚いたように振り向くとそこには田畠を吊り上げ靴べらを持ったメイド長だった。

薰

「そのだらし無い格好は何ですか！」

スミレ

「……すみません」

服を着ることしても今まで咲にやつてもうつて自分で服を着たことないのにこのようになりましたなんて一介のメイド役をしている今言える訳もなくて、大人しく謝った。

薰

「全く、貴方一体いくつなのッ？！」

服も着れないなんて幼稚園児以下ねッ！！

そう罵倒しながら麗のメイド服の腰周りのリボンを引っ張った。

グイッ！

麗

「うひ……！」

宇水家のメイド服はコルセットみたいな造りになっているため、麗は苦しそうに息を吐いた。

麗

薰

「あー、これでいいわ。ソレはもう終わって中庭の整備をして。」

満足そうに頷くとキビキビと仕事を告げ、足早にどこかに行つていった。

麗は薰がいなくなつた事を確認すると持つていた雑巾をバケツへ叩き入れ、薰が去つた方にアツカンベーをして皮肉たっぷりに言った。

バシン！

麗

「は～いッ！只今！～！」

屋敷は上空から見ると綺麗な正方形となつており正方形の中部分は全て中庭となつてゐる。

そのため中庭はとても広く、掃除するのに骨が折れるため使用人はみなこここの掃除を『地獄の掃除』と呼んでいる。

よつて、たいてい新人が担当したり罰としてさせられたりする。

麗もまたしかし。

麗

「これを一人でやる、と？」

マジですか……

ぐるりと庭を見渡すとさうそつと言つた。

麗

「なんで、私が、こんな目に…！」

なうんて愚痴をこぼしながらも後の説教が怖いので従順に従つお嬢様なのでした。

それから一時間後。

麗は誇らしげに手を腰にあて満足そうに綺麗になつた中庭を見渡した。

麗

「さすが私！」

しかし、まだ半分。

それを思い出しへなーと地に崩れ落ちた。

麗

「もう無理…」

「あ。ワイの天使！」

……まさか、この声は

麗は嫌そうに声した方を見た。

予想的中。

そこには廊下から嬉しそうに見下りしている宇水家当主の姿があった。

麗（この疲れてる時にー怒）

鏡弥

「早速『地獄の掃除』に当たつてしまつたんや

笑いながら中庭に下り近づいてきた。

麗

「その愛称知ってるなら埋め立てるなつなんなつしてトセー」

よつしりせりと立ち上がると埋めしがり言つた。

鏡弥

「埋め立てる、か。それはできやんわ」

腕を着物の袖の中に入れ、困ったよつて笑つた。

麗

「どうして?」

不思議そつにキョトンと鏡弥を見つめた。

鏡弥

「死んだ親父が一番好きやつた場所やでな…」

懐かしそうに手を組めて中庭を見た。

父親のことを思い出しきこるのだな。

麗

「…………父親。」

何故そこまで愛おしそうに言えるのだろうか。

解らないし、
解りたくもない。

麗はポツコと呟いた。

鏡弥

「…………麗？」

急に静かになつたから心配したのか鏡弥が不安そうに麗の顔を覗いた。

ハツ！

麗

「～～近いッ！それに何呼び捨てにしてんのよッ！…」

麗は田の前にあつた鏡弥の顔を殴ると絶叫した。

「

麗

「…」

「ド、コオ…！」

鏡
弥

「痛…、酷

「シツ……」「

鏡弥は殴られた頬をさすりながら辛そうに言つたが険しい顔をした麗に遮られた。

さつまでもとは明らかに異なる表情に鏡弥も真剣な面持ちで言つた。

鏡
弥

「どうしたんや?」

麗

「……誰かい。」

場所を特定するために自然と小さく短くなる声。

麗は微かな声を頼りにおもむろに声のすむまゝに歩き出した。

鏡
弥

「お、おいー!」

……なんなんや、

この娘?

普通の人には分からんやうけど、闇の世界に足を踏み入れた人なら分かる。

あれは『裏世界』で生きとる人の顔や。

鏡
弥

鏡
弥
「！」

そこにいたのは一丸とリーゼント頭で頬にキズがあり白のノースリーブを着て黒のドカンをはいた男だった。

鏡弥は忍び寄るようにして麗の隣に近づくと『何か』を見た。

麗は木々に隠れるようにしてさつきの場所からそろそろ離れてない所で『何か』を盗み見ていた。

麗を見つけるのに手間はかからなかつた。

鏡弥はスクツと立ち上がると麗の後を追つた。

「光太？！…と誰や？」

思いもかけない人物で動転しながらも、見たことない人を不思議そ
うに聞いた。

麗

「あれは…ラガー・オルゾット。フリーの殺し屋で標的を愛用のナ
イフでメッタ斬りすることから通称『シュレッター・ラガー』^{ターゲット}と呼
ばれているわ。」

二人の会話に意識を集中させているからか淡々と説明する麗。

一丸

「準備はどうだ？」

腕を組み木にもたれながら尋ねた。

ラガー

「OKだぜ。コイツも早く吸いたいって騒いでてなア」

ナイフの切断面を楽しそうになぜながらウズウズと答えた。

一丸

「まあ、待て。実行は19時だ。それまでは大人しくしていろ。」

ラガー

「解つてるぞ。今日の大財閥、西園寺家が無くなるなんて誰が考えただろうなアー！」

ゲラゲラと可笑しいそうに腹を抱えて笑つた。

一丸

「ああ、その前に。」

思ひ出したかのように手元に指を鳴らした。

パチン！

一丸

「そこに居るのは解つてゐる。出でいりやーーー！」

ドキン！

麗

「一」

鏡弥
「！」

一丸

「今までお世話をなつた坊ちゃんにじる挨拶をしないことな

一ヤマーと黒い笑みを浮かべ言つた。

の西園寺家の秘密

～Act.5 密会～

8月25日更新

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7653h/>

西園寺家の秘密

2010年10月9日00時21分発行